

## ラシーヌ悲劇について——その4——

### 『ブリタニキユス』

戸 口 民 也

『ブリタニキユス』はラシーヌがはじめて手懸けたローマ物である。舞台はネロン（ネロ）の宮廷，そして劇の中心をなす事件は兄弟殺しである。ラシーヌは神話・伝説の世界から歴史の世界へと悲劇の場を移しはしたが，こうした題材の選び方は，いかにも『ラ・テバイッド』のような悲劇で劇界に登場した詩人にふさわしいと言えそうである。

劇の背景だけを問題にすれば，ギリシャ悲劇とローマの歴史とでは，だいぶ趣きを異にする世界のように感じられるが，実際に作品を見ると，むしろ共通点が多すぎることに気づかざるを得ない。同じ作者の書いたものである以上，それは当然のことではある。とはいえ，背景をなす世界が変わってもなおかつ共通して現れるラシーヌ悲劇の特徴的性格を見てとろうとする際，『ブリタニキユス』はひとつの興味深い事例となってくることは確かである。何故ならそこには，ラシーヌ悲劇の基盤をなす認識が，あるいはラシーヌ独特の悲劇のメカニズムが，『ラ・テバイッド』の時と同様ははっきり現れていて，しかもその現れ方には，ちょうど典拠の推移に應ずる形で，ある重要な変化がうかがえるからである。本稿ではまずこの点について考え，次いで『ブリタニキユス』という作品自体の検討へと移ることにしたい。

『ラ・テバイッド』がギリシャ悲劇を象徴する呪われた一族の最期を主題としているのに対し，『ブリタニキユス』ではローマの歴史の中でも最も暗い部分を象徴するネロンの最初の悪業を取上げている。一方では父親殺しと近親相姦という過去が重くのしかかっているが，もう一方では母親殺しと暴政という未来が避けようもない現実として予感されている。しかもそこには，同じ血筋のうちに執拗に繰返される罪や不幸な事件といった，ラシーヌ悲劇固有のモチーフが根底にあり，そして現に進行中のドラマは兄弟殺しという血腥い結末で

締括される。その意味で『ブリタニクス』はまさに『ラ・テバイッド』のローマ版とさえ言えそうである。

『ブリタニクス』の主題は怪物の誕生である。別の言い方をすれば、ネロンはいかにしてネロン自身となるか、ということだ。劇の冒頭では、ネロンは未だその正体を現してはいない。だが彼が怪物となるべく生れていることは疑いようもない事実として提示されている。

いくら正体を隠そうとしても無駄なこと。私にははっきりと読み取れるのです。あの子の顔には

ドミシユス家の冷酷非情な気性が現れている。

その血を引いた傲慢にあわせて、あの子は

この私からネロン一族の気位も受け継いでいる。(I.1.)

ネロンが何者であるか知るには、彼がどのような血筋であるかを知るだけで十分、というわけだ。これはまさに『ラ・テバイッド』の冒頭でジョカストが日輪に向かって語りかけている次のような言葉からうかがえるのと、全く同じ認識である。

ああ、しかし、あの怪物たちもあなたをおびえさせはすまい。

ライユス一族はあのような者たちをありふれたものにしてしまったのだから。

父と母の犯した罪のあとでは、息子たちの罪も

恐しいとも思わずに見られるはず。

息子たちが不忠者であれ、二人とも悪人であれ、

さらには兄弟殺しであろうとも、驚かれたりはなさるまい。

あの二人が不倫の血を引いていることはあなたもご存じのとおり。

もし二人が高潔の士でもあろうものなら、かえって驚きもなさるでしょう。(I.1.)

ここで注意すべき点は、ネロンが実際に暴君であり、怪物であったという広

く知られている事実のみが問題となっているのではない、ということである。ラシーヌは無論そうした歴史的事実を前提に、ネロンという人物を自己の作品の中で形象化している。だがその場合もラシーヌは、歴史を悲劇に仕立てるべく、彼独自のやり方で歴史を再構成している。そのやり方とはこうである。ネロンは悪業の限りを尽くした。それは歴史に示されているとおりである。ところでネロンは、暴君となる以前から悪徳の数々を隠していたし、己れの本心を偽る術にも生まれながらにして長けていた、とタキトゥスは『年代記』に書いている。とすれば、ネロンはもともと怪物、暴君となる素質を持っていたに違いない。家系をたどってみても、そうと思いつくところはいくつもある。母アグリピーヌ、母の兄カリギュラ、父ドミシユス・エノバルピユスといった最も近い血縁だけに限ってみても、これらの人物の血を引くネロンがいかなる人間であるかは、およそ想像できようというものだ。またネロン以前の皇帝たちの統治あるいは所業を見ても、陰惨な罪、悪徳、暴虐に満ちている。従って、もともと悪の素質を十分すぎるほど持っているネロンが、悪を助長するには恰好の地位とも言うべき皇帝の座に即いたのであれば、その血筋にならい、かつまた歴代皇帝の例にならい、悪逆非道の怪物、暴君となることは火を見るよりも明らかである……。かくして《ネロンは怪物であった》という歴史的事実は、いつの間にか《ネロンは怪物となる運命のもとに生まれた》即ち《怪物になるということはネロンにとっては避けられぬ宿命であった》という悲劇的認識へと変貌するのである。

歴史的事実というものは、それがそのような形を取るに至る以前は、予想されるいくつもの可能性のうちの一つでしかなかったはずだが、一度そうした形を取ってしまうと、結局はそうなる他なかったものの如く収まってしまう。歴史はそうした既定の諸事実の集積から成っているだけに、それを振り返って見る人間の目には、歴史上の一連の諸事実をたどり直す時、そこに何らかの必然性が働いていたように映るのである。だが問題はその先である。歴史上の一連の諸事実の間に因果関係を認めるにしても、ある事実はそれに先行する他の事実が潜在的に含んでいくつもの可能性の一つがたまたま顕在化した結果に他ならないと考えれば、歴史とは実は様々な偶然性をはらみつつ、《結果としてそのようになってしまったもの》となるだろう。ところが、もし逆に、

先行する事実はいくつもの可能性をはらんでいるように見えるが、実はそのうちのひとつだけが真に可能な実現形態であり、従って後続する事実は《結局はそうなるしかなかったもの》なのであると考えれば、歴史とは必然性に支配された因果関係の連鎖となってしまう。

ラシーヌがこの二つの見方のどちらをとるかと言えば、明らかに後者である。このラシーヌの立場は、彼がローマ史といった純然たる歴史の世界から悲劇の題材を得ようとする時だけでなく、ギリシャ悲劇のように神話・伝説に基づく世界に典拠を求める場合にも、等しくとっているものである。悲劇詩人ラシーヌにとって問題なのは、彼が題材として選んだ事件が、それをひとつとして含む歴史もしくは神話・伝説全体の中でまさに起こるべくして起こった事件でなければならない、ということだ。しかもラシーヌは、その事件がそれに先行ないしは後続する様々な事件と決定的な因果関係によって結ばれているのだと機会あるごとに強調することで、自分の悲劇から偶然的要素を一切排除し、必然性一色に塗り上げてしまうのである。例えばある血筋に代々同じような罪や過ちが繰返され、同じような不幸や災いが度重なるとする。ラシーヌがそうした血筋のある誰かを主人公に選ぶ際には、主人公がこれからの運命は彼の親や先祖が——時に彼自身が——これまで既にたどってきた運命によって規定するのだが、同時に、彼の親や先祖の運命がいかなるものであったかということは逆に主人公自身の運命との整合性において説明されるのである。ネロンは怪物である。それならば彼の親や祖先も当然ネロンのような怪物を生むにふさわしい者たちであったはずだ。ラシーヌは例えばタキトゥスを読み、自分の推論を裏付けるような記述を探し、発見する。もはや疑問の余地はない。これでネロンが怪物である理由は証明された。従って、こうした先祖や親の血を受継ぐ以上、ネロンは怪物となるしかない、というわけである。

ラシーヌ悲劇における宿命とは、実はこうしたいわば循環論的因果律に基づいて歴史あるいは神話・伝説を——必要とあらば《事実》の改変や拡大解釈といった手段も用いながら——再構成した上で、改めてこの世界を支配する《歴史的必然》の相のもとに人間のたどるべき運命を見直した結果である、と言えるだろう。ラシーヌの宿命には偶然的要素が介入する余地がなく、従って主人公たちも宿命からは絶対に逃がられなくなるというのも、以上見たところか

らすれば納得されることである。

こうした宿命が成立する基盤には、人間の世界には悪が蔓延し、それがとめどもなく自己増殖を続けて行く、とするラシーヌの悲劇的認識がある。悪の存続の問題は『ラ・テバイッド』以来、ラシーヌ悲劇の核心部分を占めてきた問題であり、『ブリタニキウス』においても怪物の誕生という主題と密接に関わっていることは間違いない。ただ、問題の本質自体は同じであっても、その現れ方には『ラ・テバイッド』から『ブリタニキウス』に至る過程で変化ないしは推移とも言うべきものが見られることもまた確かである。その変化ないしは推移は、悲劇の中で神々がいかなる位置を占めているか、というところに象徴的に現れている。

人間は救いようもないほど悪に染まっているという状況は、既に『ラ・テバイッド』にはっきりと見られたことであるが、そこには同時に、こうした状況は神々の意図が働いた結果出来てしまったのではないかという深刻な疑問も提示されていた。神々は人間を望んでもいない罪に導いておきながら、しかもその罪が原因となってその後同じような罪が人間たちの世界で次々と繰返されるのを黙って放置しているとしか考えられない。とすれば、人間世界の墮落した現状は、実は神々にこそ責任があるのではないのか。つまり、悪のそもそもの起源は神々自身にあるのではないだろうかという疑いが、ここでは提起されているのである。

しかし、人間の力ではそうした状況を改めることはもはやできなくなっている。あるいはむしろ人間には神々の助けがない限りそうした状況を改める力などそもそもないのだ、と言うべきなのかもしれない。いずれにせよ人間は無力であり、しかも神々にも人間を救おうとする意志があるとは思われない。とすれば人間は自らの内に潜む悪に促され罪や過ちを繰返すしかなく、現にそうなっている。こうして人間の世界に悪がとめどもなく蔓延して行くうちに、おそらくその当初は人間の運命に積極的に関与していたはずの神々も、次第に人間との関わりから手を引き、事態がそのまま進むにまかせてしまう。神々は人間世界から徐々に遠ざかり、ついにはその姿を完全に隠してしまうのである。あるいは、悪に染まりきった人間が、もはや悪の起源についても神々の存在についても意識しなくなっただけのことかもしれない。だが、人間にとっ

て今や中心的関心が悪の起源の問題から、悪が浸透したこの世界の現実へと移っていることは確かである。

こうした推移のきざしは『ラ・テバイッド』において既に現れていたが、それが『アンドロマック』では一層明瞭になってくる。オレストのように自分の不幸は神々の悪意によるものだと意識し続ける人物はやはり存在するが、ここではむしろ情念という人間を罪や過ちへと駆りたてる《ばね》の方に劇の興味が集まっている。つまり、神々の意図がどうであるかということよりも、悪が情念という《ばね》を通じて現実にどのように人間を動かすものかが、『アンドロマック』における最大の関心事となっているのである。そして今『ブリタニキウス』に至って、神々は完全に人間の意識から消えてしまい、いわば神々不在の世界で悲劇が展開されることになる。悪はもはや神々とは関わりない、純粋に人間の問題として提示されているのである。

こうした推移は、神話・伝説の世界から歴史の世界へと——別の言い方をすれば、神々の存在が重要な意味を持ち、人間の運命も神々の意志によって決定されるギリシャ悲劇の世界から、神々がもはやレトリックの対象でしかなく、人間にとっても何ら意味を持ち得ない、神々不在の世界とも言うべきローマ史の世界へと——ラシーヌが悲劇の《場》を移したことと決して無関係ではない。そして、その間には『アンドロマック』のような、ギリシャ悲劇としては宿命とか神々の意志という要素がどちらかと言えば稀薄な悲劇を典拠とする作品が書かれていることも合わせて考えてみると、典拠の推移と悪の問題の現れ方との関係は一層はっきりしてくるだろう。

『ブリタニキウス』におけるネロンの宮廷は、神々不在の世界において悪の存続の問題が相変わらず——というよりは更に深刻な様相を呈すに至ったことを示す象徴的な《場》としてラシーヌが選んだものである。ここでは悪の起源は問われないし、また問うこと自体もはや思いつかぬほど悪は人間の世界に浸透している。悪の執拗な存続という悲劇的認識を基盤とするラシーヌ的宿命のメカニズムは、その起源においては神々によって《最初のひとはじき》を与えられたのかもしれないが、一度そうして動き始めるや否や、あとは神々の手を借りるまでもなく、人間存在の本質をなす悪への傾向といったもの——そしてその直接的な現れである情念という《ばね》によって、自ら動き続けて行くの

である。

＊ ＊ ＊ ＊

一見すると『ブリタニキウス』は権力闘争のドラマのようである。確かにアグリピーヌとネロンの争いにはそうした要素も多分に含まれている。アグリピーヌは野心家であり、彼女がこれまで権謀術数の限りを尽くし、必要とあらば暗殺という手段さえ辞さずに息子ネロンを帝位に即けたのも、息子を通じて自ら絶対権力を握ろうとしたためである。だがネロンは今では母の干渉を嫌い、名実共に皇帝としての実権を欲して母に反抗しはじめる。そしてアグリピーヌはネロンを抑えるための対抗手段を模索している。これはまさに宮廷内の権力闘争そのものと言えそうである。

しかし、既に述べたように、『ブリタニキウス』の主題は怪物の誕生である。ネロンがアグリピーヌに反抗するのは、政治的な意図があつてのことではなく、何よりも自分自身として生きたいという欲求が原因となっている。ただそれにはアグリピーヌの支配から何としても脱け出さねばならない。ネロンはアグリピーヌからすべてを与えられている。妻、後見役、皇帝の地位——実際彼の持っているものは、どれひとつをとってもアグリピーヌが関与しなかったものはないほどである。それがネロンには我慢ならない。何故なら母は息子をその支配下にとどめておくために、つまりは自らの支配欲を満たすためのみ、これらすべてを与えたにすぎぬからである。だから、母が恩恵と称しているものも、自分をそうした軛に縛りつけ、自分を常に思いのまま操ることのできる傀儡にとどめておこうとする意図の現れなのだ、とネロンは考えているのである。権力をめぐる争いと見えたものの背後には、このようにネロンの自由への欲求から生じた確執が潜んでいる。つまりこのドラマは、ネロンがアグリピーヌの支配を脱し、自分自身として生きること、言いかえればネロンが《怪物として生まれること》が問題となっているのである。

「私の悲劇の主題はブリタニキウスの死と同じくらいアグリピーヌの失寵である」とラシーヌは第二の序文で語っているが、それはこの二つの主題があくまで怪物の誕生という真の主題が実現される過程において必然的に生ずる事件

であるからに他ならない。アグリピーヌはあくまでネロンを支配し続けようとしている。彼女には権力を手放すつもりは毛頭ないし、また一度ネロンに対する支配力を失えば、あとは自分が間違いなく破滅する——それも予言が正しければ息子の手にかかって殺される——と知っているからである。ただ彼女は自分の力が既に衰えているのを感じている。ネロンは皇帝の権威がどれほど強力なものか知ってしまった。

あの日、あの忌むべき日のことは今もはっきりとおぼえている。

ネロン自身が己れの栄誉に目も眩んだのです……（I.1.）

そればかりか、ネロンは「ドミシユス家の冷酷非情な気性」と「ネロン一族の気位」を合わせ持っている。彼女は息子にすべてを与えはしたが、もしその息子が彼女の恐れるように恩知らずであれば、彼女から与えられたものすべてをそのまま彼女に対する武器としかねない。それ故アグリピーヌは、かつてネロンを帝位に即けるために自らの手で失脚させたブリタニキユスを、今度はネロンを抑えるための最後の切札として利用しようとしている。自分がブリタニキユスに味方をすればネロンの地位は安定を欠き、従ってネロンも勝手に振舞うことはできなくなるはず、というわけだ。これは危険な賭である。しかも賭に敗れば自分の破滅は確実である。だがアグリピーヌにとって破滅を防ぐ方法はもはやこれしか残されていない。こうしてブリタニキユスの存在はアグリピーヌの最後の支えとなってきたわけだが、逆にネロンにとってはブリタニキユスが存在する限りアグリピーヌの支配からは永久に脱せない、ということの意味してくる。だから、

……やつを亡き者にして、

アグリピーヌの気違いじみた力から完全に自由になるのだ。

やつが生きている限り、おれは中途半端にしか生きられぬ。（IV.3.）

怪物の誕生という主題はここに至ってラシーヌの言う「ブリタニキユスの

死」と「アグリピーヌの失寵」という二つの主題と完全に一致してくる。もはや「中途半端」に生きるのには我慢ならぬネロンは何としてもブリタニキユスを滅ぼし、同時にアグリピーヌの画策を打ち砕かねばならない。そうすることによって真に自分自身として生きること、それが今やネロンにとっては至上命令となっているのである。

ところでこの至上命令を実現するためにネロンが選んだ方法は、かつてアグリピーヌが野望を達成するために選んだ手段と奇妙なまでに酷似している。アグリピーヌが偽りの抱擁でクロディユスを誤らせたように、ネロンも同じ手段で母を欺き、ブリタニキユスを欺く。

おれは敵を抱きしめもする。ただしそれは相手の息の根を止めるためだ。

（IV.3.）

アグリピーヌがパラースという共犯者を持っていたように、ネロンはナルシスを共犯者とする。この二人の解放奴隷は、いずれも主人の信頼を裏切り、主人の破滅を準備したことになるわけである。そして最後の止めには毒薬を使うところまでネロンは母のやり方を踏襲するといった具合である。もはやこれは偶然の一致とは言えない。今あることはすべてかつてあったことの忠実な再現であり、過去のやり直しでしかない。ネロンはアグリピーヌからすべてを受継いだ。その際母がいかにして自分の欲望を実現したかを研究し、その方法まで忠実な生徒の如く学び取った、とさえ言えそうである。かくしてネロンはブリタニキユス殺害を実行する。それはネロンがアグリピーヌのもっていた悪の要素を完全に継承しおえたこと、すなわち悪の世代交替が完了したことをも意味している。怪物はついに誕生したのである。

ラシーヌが『ブリタニキユス』を通じて描いてみせたローマ史の世界は、アグリピーヌやネロンのような怪物たちを次々と生み出してゆく世界である。そこに見られるのは悪の継承のドラマであり、それまで権力の座にあった怪物と新しく権力の座に即こうとする怪物とが、支配欲をむき出しにして争う悪の世代交替のドラマである。そうしたドラマの起こる度に陰謀、裏切り、殺人と

いった罪が繰返され、しかもその罪のひとつひとつが更に次の同じような罪を誘発してゆく。

同じ罪、同じ不幸がいつ果てるともなく続く世界にあっては、たとえ自らは悪を行う意志がない者も、この世界に身を置く限り何らかの形で悪に加担し、罪や過ちを犯さざるを得なくなってしまう。例えば《廉直の士》ピュリュスがこの世界でなしえたことは何であったか見るだけでよい。彼はアグリピーヌに引立てられ、ネロンの後見役をつとめてきた。それは良い。だがそれだけではなく、この《廉直の士》はアグリピーヌに味方して、ブリタニキユスの失脚とネロンの皇帝即位に一役買い、結果としてはアグリピーヌの野望を成就させている。その後彼はネロンをアグリピーヌから独立させることに心を砕いてきた。皇帝の権位を確立し、その上でネロンに善政を施かせようと願ったからである。それも良い。しかし彼の努力は、ネロンがアグリピーヌにも増して悪業を重ねる条件を整えることにしかならなかった。彼は怪物の誕生を助け、その結果がブリタニキユスの死とアグリピーヌの破滅という事態となって現れるのである。《廉直の士》がこうした奇妙な役割しか演じられないのは、悪の原理の支配する世界においては、たとえ人間がそれに対抗する価値を信じて行動しようとしても、いつの間にか悪の原理に組み込まれてしまい、結局のところ悪を助長することしかできなくなる、という現実を証明しているのである。

こうした世界では悪を拒否し、身の潔白を守ろうとしても、それが救いとはならない。ブリタニキユスは、ラシーヌが序文で述べているように、「心気高く、恋に燃え、率直さにあふれる」皇子である。彼は自分では何ひとつ罪は犯さず、またピュリュスのように——その意図はともかくとしても——アグリピーヌやネロンといったこの世界の悪を象徴する人物たちと積極的な関わりを持つとうともしなかった。しかし、たとえ彼にはその意志がなくとも、《悪》の方が彼を放置してはおかないのである。アグリピーヌが彼を利用して近づいてくるし、そうなれば今度はネロンが彼を憎み、殺そうとする。そして彼が信頼するナルシスは彼を裏切ることしか考えていない。それもすべて彼が帝位を継承する資格の持ち主だからである。事実、父クローディウス帝がアグリピーヌと再婚する以前には、ブリタニキユスこそ次の皇帝になるものとされていた。従って、今は失脚して無力な身とはいえ、何か事があれば、ネロンを牽

制する道具として、しかも場合によってはネロンに取って代る可能性も全くないとは言えぬだけに、彼の存在は注目されざるをえない。ブリタニキユスが、彼自身の意志とは関係なく、アグリピーヌとネロンの争いに巻き込まれるのは、このように考えれば最初から避けられぬことだったのである。

それにブリタニキユスはジュニーを愛している。アグリピーヌが二人の恋に味方しようと申し出て来る時、彼はその真意を疑いつつも、助力を期待してしまうのである。実際のところ、この「心気高く、恋に燃え、率直さにあふれる」若者には、自分が現に身を置いている世界がどれほど危険なものであるのか理解できない。彼の長所であるはずの「信じやすさ」（第一の序文）は、悪の支配する世界では何の力ともならず、かえって悪につけ入る隙を与え、身の破滅を招く原因としかならないのである。ブリタニキユスはナルシスを信じ、アグリピーヌやネロンまで信じてしまう。だがジュニーが警告するように、

……あなたのお心をもってあの方〔ネロン〕の心をはかつてはなりません。

お二人の歩まれる道は異なるのです。

ネロンも宮庭も、私は今日ようやく知ったばかり。

けれども、（思い切って申します。）この宮廷では、ああ、

人の語ることは何もかも、その思っていることと何とか離れていること  
でしょう！

言葉と心とがまるで裏腹ではありませんか！

ここでは誰もが、どれほど喜んで誓いを破っていることでしょう！

あなたにも私にも、これほど無縁な世界がございましょうか！（V.1.）

ネロンの宮廷にとどまることは否応なく悪と交わることを意味している。たとえ自分は悪に染まるまいとしても、そこにとどまる限り、悪の方から関わりを持つようとしてくるのである。ジュニーが力づくで宮廷に拉致されたのも、彼女の愛するブリタニキユスがアグリピーヌとネロンの争いに巻き込まれたため、彼女の身にまで危険が及んだのに他ならない。しかもネロンの恋という彼女にしてみれば全く思いもよらなかった事態が生じ、そのため今ではジュニー自身がブリタニキユスを破滅させる新たな要因となってしまう。だからこそジ

ジュニーはブリタニクスに、こうした悪しき世界から、それも何よりもまずネロンから身を隠すようにと、再三懇願するのである。

お引取り下さい、殿下、皇帝陛下がおいでになります。(Ⅱ.6.)

お引取り下さい、殿下、お逃げ下さい、私が心を閉ざしているために、ネロンはあなたに怒りを燃やしています。(Ⅲ.7.)

重ねて申します。どうかあの方の目の届かぬところに身をお隠し下さい。(Ⅲ.7.)

悪と関わらずに身の潔白と安全を守ろうとすれば方法はそれしかない。この世界のことは、

すべて私には疑わしい。恐ろしいのです、すべてが誤った道に陥っているのではないかと……(Ⅴ.1.)

だが、たとえ意に反してでも、一度この世界に関わってしまった以上、そこから無事に逃がれることはもはや不可能である。それがラシーヌ悲劇の掟であり、主人公の宿命である。

まず第一にブリタニクスは、仮にジュニーの警告に従う気になったとしても、やはりこの世界から逃れられなかったはずである。クローディウス帝の嫡子であるために、彼は帝位をめぐる確執から身を守るすべを奪われている。だがそれにもまして、彼はクローディウスの息子として、父の犯した過ちを最後まで身に負わねばならぬ運命にあるからである。ラシーヌ悲劇がかつてあったことの忠実な再現、過去のやり直しのドラマであるということは、先に見たアグリピーヌとネロンの場合だけにとどまらず、クローディウスとブリタニクスの場合についても同じく当てはまるのである。とすれば、ブリタニクスが父と同じ過ちを繰返し、信じてはならぬ者を信じて、ついには父と同様毒殺さ

れるという運命をたどるのも、ラシーヌ的宿命の法則からすれば必然的結果でしかない。

第二にジュニーの場合であるが、彼女とブリタニクスとの愛にはやはりクローディウスが関与している。ブリタニクスがまだ帝位継承者と目されていた頃、ジュニーはその血筋から見てもブリタニクスに最もふさわしい娘としてクローディウスから息子の許婚者に選ばれた。つまり、ジュニーとブリタニクスは、クローディウスの決定という《過去》と共に、いずれも帝位に最もふさわしい《血筋》という、二重の絆で結ばれているのである。そればかりではない。ジュニーの兄シラニウスとブリタニクスの姉妹オクタヴィーとは、やはりクローディウスによって結婚を約束されていたが、アグリピーヌの陰謀のため婚約を解消され、オクタヴィーはネロンの妻となり、シラニウスはその婚礼当日自殺している。ここにもまたクローディウスの過ちが、そしてアグリピーヌとネロンというジュニーとブリタニクスにとって常に不幸をもたらす怪物たちが、影を投げかけているのである。だからジュニーはおびえずにはいられない。

私はネロンが恐ろしい、この身につきまとう不幸が恐ろしいのです。(Ⅴ.1.)

ジュニーの運命は、ただ愛し合っているという事実によるだけでなく、その「身につきまとう不幸」によって、ブリタニクスの運命と固く結ばれているのである。とすれば、彼女が今またブリタニクスとの関わりからネロンの宮廷に無理矢理引き出されてしまったのも、彼女自身がブリタニクスと共有する不幸な運命による必然としか言いようがなさそうである。

ラシーヌはジュニーを死なせはしなかった。それだけでなくアグリピーヌやネロンといった怪物たちが圧倒的な力をふるうこの劇で、ブリタニクスばかりかジュニーまでも無惨な最期を遂げさせたとすると、劇自体があまりに陰惨なものとなってしまう、観客の反撥を招きかねないと考えたためであろう。劇の結末で知らされるように、ブリタニクスの死を知ったジュニーはネロンの宮廷から逃がれる。彼女は「命こそ断たぬものの、ネロンにとっては死んだも

同然の身」(V.8.)となり、こうしてジュニーをついに得られなかったネロンは絶望から狂乱状態に陥る。そして裏切者のナルシスは民衆の怒りにふれ、惨殺される。つまりラシーヌは、観客の感情を考慮して、劇の最後の部分では悪人たちもそれぞれ罪の報いを受けたのだという体裁を一応整えたのである。

しかし、形の上ではこのような観客を配慮した一種の妥協を行いはしたが、ラシーヌは悲劇の本質まで変えるような妥協は行っていない。ジュニーが「ネロンにとっては死んでも同然の身」となる結末は、ネロンに絶望という罰を与える意味においては確かに観客への妥協と考えて差支えないが、『ブリタニキウス』という悲劇自体の持つ意味を考えれば、ジュニーが必ずしもここで《実際に》死なねばならぬわけではない。重要なのは彼女が《実質的には》死を遂げざるを得なかったという事実であり、その《死》は「ネロンにとって」だけでなく、ネロンに象徴される悪の支配する世界全体に対してジュニー自らを選ばざるを得なかったものであるということである。確かにジュニーは最後まで悪を拒否し続け、身の潔白を守り通すことができた。彼女はブリタニキウスのように無知とか軽率という過ちさえ犯さず、この世界の現実を見誤ることもなかった。それにもかかわらず、ジュニーはついにブリタニキウスを救うことはできず、自分も《死》を選ばなければならなかった。これは、ジュニーの存在が悪の原理に支配されるこの世界においてはそれに対抗する原理にも、また悪からこの世界を救う力にも、ついにはなり得ないのだということを証明する苦い事実にはならない。つまり、人間の世界はそれほどまでに墮落していて、ジュニーのような汚れを知らぬ人間は、根底まで悪に蝕まれているこの世界には存在する場さえ見出せない、ということである。それ故、ラシーヌが選んだ形がどうであろうと、ジュニーは結局は死ぬしかない。それに、彼女をこれまで辛うじてこの世界につなぎとめていたブリタニキウスが死んだ今、彼女に残された道は、深い絶望と共に、自らの存在をこの世界から完全に抹殺するしかなかったのである。

絶望——それが『ラ・テバイッド』の時と同様、『ブリタニキウス』の悲劇が幕を閉じた後ただひとつ確実なものとして残る感情である。この感情に襲われるのはジュニーのような犠牲者だけではない。アグリピーヌやネロンのように自ら悪を選び取った人物たちにしても、最後に行き着くのは同じ感情なので

ある。アグリピーヌは今や自分の最期を確実なものとして予見している。

すべては私が予言したとおりにってしまった。(I.1.)

劇の冒頭で語られたこの言葉は、実は今、劇の幕が閉じられる時にこそ語られるにふさわしい。彼女は、これまで自分のしてきたことはすべて身の破滅を準備するための空しい努力でしかなかったことを思い知らされたのである。しかもその破滅は、彼女がまさに自分の分身としてあらゆる意味において《生み育てて来た》ネロンが、もはや分身であることをやめ、一個の怪物として誕生するところまで生長したためなのである。

ついにここまで来てしまった。あの残酷非情の子を引き止めるものはもう何もない。

私に予言されていた災いが、今にもこの身にふりかかってこよう……

(V.7.)

そしてネロンだが、彼はついにアグリピーヌの支配から完全に脱した。彼は今や自由であり、自分自身として生きることができる。しかしそれは同時に悪夢の始まりでもある。ネロンが自らの意志で選び取ったかの如く見える《自由》は、これまでアグリピーヌの《分身》でしかなかった彼がついに独立して《自分自身》となったという意味では勝利に違いないが、実はそれは結局のところ自分もまた母や先祖たちのたどってきた道をたどり直すこと、すなわち怪物として生きる運命に決定的に隷属する第一歩を踏み出したことでしかなかったのである。

続けるがよい、今こうして一步踏み出した以上、もはや後には退けまい……

…(V.6.)

ネロンがこの先どのような運命をたどるかは、この言葉に続くアグリピーヌの予言に示されているとおりである。ジュニーへの恋の挫折からくる彼の絶望



も、彼がいずれ味わねばならぬ真の絶望への前触れでしかない。

ジュニーの、そしてアグリピーヌやネロンの絶望を通じて『ブリタニクス』の悲劇が語りかけていることは、悪を選び取るにせよ、あるいは悪を拒否するにせよ、人間の運命は結局のところ絶望へと至る道を空しく歩み続けることなのだという、悲劇詩人ラシーヌが自ら創造した悲劇の世界に見出した、それ自体絶望的のしか言いようのない暗い真実なのである。

#### 註

前回同様、引用はラシーヌのテキストからのみにとどまった。多くの文献から貴重な示唆を得たことはこれまでと変わりなく、またその影響が顕著に現れているところが少なからずあることも私自身感じている。それはラシーヌについて知る方々がお読みになれば明らかだろう。

今回は主な文献を註にあげたが、今回からはそれも省略し、参考文献名は直接引用した場合や特に必要と感じた場合を除き、一切ふれぬものとする。そしてこの論考が完結した折、全体を通じての参考文献表を最後に付け加えることにしたい。